

聴聞の心得

立春（二月四日）を過ぎましたが、昨日（二月七日）は雪が降りました。まだまだ、春を感じるのには先になりそうです。ただ、五ヶ瀬ハイランドスキー場は暖冬の影響で雪不足だそうですから、少々の寒波は我慢しましょう。

さて、二〇〇八年二月の寺報（第八十号）で「聴聞の心得」について本欄で書きました。十二年前になりますので覚えてる方は少ないだろうと思います。本堂外陣の柱に「聴聞の心得」の文言を書いた紙を貼っています。次のようなものです。

- 一 聴聞の心得
- 一 このたびのこのご縁は初事と思ふべし
- 一 このたびのこのご縁は我一人のためと思ふべし
- 一 このたびのこのご縁は今世最後と思ふべし

もうずいぶん前になります。本願寺佐賀教堂で見た記憶があります。（十二年前には「どこのお寺かは忘れませんが、ご縁があつてお参りしたとき、この言葉に出会い」と書きました。間違いです。）

この心得の味わい、十二年もたつと感じ方が変わってきたような気がします。この心得に出会ったときは、お聴聞の姿勢はこうあるべきだと指導されているように思え、それに納得している私でしたが、ご講師の法話はこのように聞くのですよ、と参詣者の方々を指導するものではなく、阿弥陀さまのお救いに対する心得はずだと思ふようになってきたのです。

①このたびのこのご縁は初事
『蓮如上人御一代記聞書』

の第一三〇条に、
一、ひとつことを聞き、いつも初めたるやうに、信のうへにはあるべきなり。

ただ珍しきことをききたく思ふなり。ひとつことをいくたび聴聞申すとも、めづらしく初めたるやうにあるべきなり。

とあります。これは、阿弥陀さまの変わらぬお救いに対して「初めたるやうに」聞くべきだよとお示しにされたものであつて、決して話し手に対して初めて聞くお取次ぎを求めることではありません。

②このたびのこのご縁は我一人のため

『歎異抄』に、
聖人（親鸞）のつねの仰せには、弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。
とありますのは、これも阿弥陀さまのお慈悲に対してのお言葉なのです。

私一人にまで、至り届いてくださるお慈悲であつたといいたきたいものです。

③このたびのこのご縁は今世最後

法座が午前・午後とあり、間に昼食をはさむとどうして午後後は眠たくありません。「今生最後」ならとても眠れないことでしょうか。それでも眠くなりますが、ご講師は「お食事いただくとお眠くなります。どうぞゆっくりお休みください」とお話になることばかりです。御堂は安心の眠り場だから眠れるのです。安心できない場所でも眠れません。阿弥陀さまはそんなついで寝入ってしまう私を片時も忘れではありません。まさにお正信偈の「撰取心光常証護」です。眠っている最中もお慈悲の真つ只中ですが、このご縁がずっと続くわけではありません。やはり、一座一座のご縁をこれで最後だと聞きたいですね。

法語の世界

《原文》
「愚者三人に智者一人」とて、なにごとくも談合すれば面白きことあるぞと、前々住上人（蓮如）、前住上人（実如）へ御申し候ふ。これまた仏法がたにはいよいよ肝要の御金言なりと云々。
（『蓮如上人御一代記聞書』二百四十四）

《現代語訳》
「二人集まると、よい知恵が浮ぶ」という言葉があるように、どんなことも集まって話しあえば、はつとするようなよい考えが出てくるものだ」と蓮如上人が実如上人に仰せになりました。これもまた仏法の上では、きわめて大切なお諭しです。

《現代語訳》
愚者三人に智者一人……三人集まるとよい知恵が浮ぶという意。

二〇二〇年春季彼岸会法要のお知らせ

とき 三月二十日（金）午前九時半
ところ 金光寺本堂

勤行 正信念仏偈（草譜）・和讃六首引き

その他 彼岸会法要は仏教婦人会の例会になつております。会員の皆さんのご参詣をお待ちしております。一般の皆さんのご参詣もお待ちしております。また、法要後は仏教婦人会総会を開催します。

法事について

昨年秋参り（家庭報恩講）や恩講の際に本年の年忌のご案内をお届けしました。さつとさつと、ご法事のご連絡をいただいております。その際によく言われるのが、祥月命日より前なら早くても法事をつとめていいですよね。お答えするのは、祥月命日より後になつてもいいですよ。法事をつとめないはいけません。後になつても心配されなくていいです。また、祥月命日が同じ日になつていくケースが本年は多数あります。日程を決められた際には早目に連絡してください。連絡を立って寺報で紹介させていただきます。（仏事参照）